

## 主日礼拝説教「遣わされて生きる」予稿

日本基督教団石神井教会 2026年6月21日

### 【旧約聖書日課】アモス書 7章10～15節

<sup>10</sup>ベテルの祭司アマツヤは、イスラエルの王ヤロブアムに人を遣わして言った。「イスラエルの家の真ん中で、アモスがあなたに背きました。この国は彼のすべての言葉に耐えられません。<sup>11</sup>アモスはこう言っています。

『ヤロブアムは剣で殺される。』

イスラエルは、必ず捕らえられて

その土地から連れ去られる。』」

<sup>12</sup>アマツヤはアモスに言った。「先見者よ、行け。ユダの国へ逃れ、そこで糧を得よ。そこで預言するがよい。<sup>13</sup>だが、ベテルでは二度と預言するな。ここは王の聖所、王国の神殿だから。」<sup>14</sup>アモスは答えてアマツヤに言った。「わたしは預言者ではない。預言者の弟子でもない。わたしは家畜を飼い、いちじく桑を栽培する者だ。

<sup>15</sup>主は家畜の群れを追っているところから、わたしを取り、『行って、わが民イスラエルに預言せよ』と言われた。

### 【使徒書日課】使徒言行録 13章1～12節

<sup>1</sup>アンテオキアでは、そこの教会にバルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、キレネ人のルキオ、領主ヘロデと一緒に育ったマナエン、サウロなど、預言する者や教師たちがいた。<sup>2</sup>彼らが主を礼拝し、断食していると、聖霊が告げた。「さあ、バルナバとサウロをわたしのために選び出さない。わたしが前もって二人に決めておいた仕事に当たらせるために。」<sup>3</sup>そこで、彼らは断食して祈り、二人の上に手を置いて出発させた。

<sup>4</sup>聖霊によって送り出されたバルナバとサウロは、セレウキアに下り、そこからキプロス島に向け船出し、<sup>5</sup>サラミスに着くと、ユダヤ人の諸会堂で神の言葉を告げ知らせた。二人は、ヨハネを助手として連れていた。<sup>6</sup>島全体を巡ってパフォスまで行くと、ユダヤ人の魔術師で、バルイエスという一人の偽預言者に出会った。<sup>7</sup>この男は、地方総督セルギウス・パウルスという賢明な人物と交際していた。総督はバルナバとサウロを招いて、神の言葉を聞こうとした。<sup>8</sup>魔術師エリマ——彼の名前は魔術師という意味である——は二人に対抗して、地方総督をこの信仰から遠ざけようとした。<sup>9</sup>パウロとも呼ばれていたサウロは、聖霊に満たされ、魔術師をにらみつけて、<sup>10</sup>言った。「ああ、あらゆる偽りと欺きに満ちた者、悪魔の子、すべての正義の敵、お前は主のまっすぐな道をどうしてもゆがめようとするのか。<sup>11</sup>今こそ、主の御手はお前の上を下る。お前は目が見えなくなって、時が来るまで日の光を見ないだろう。」するとたちまち、魔術師は目がかすんできて、すっかり見えなくなり、歩き回りながら、だれか手を引いてくれる人を探した。<sup>12</sup>総督はこの出来事を見て、主の教えに非常に驚き、信仰に入った。

## 【福音書日課】 マルコによる福音書 6章1～13節

1イエスはそこを去って故郷にお帰りになったが、弟子たちも従った。2安息日になったので、イエスは会堂で教え始められた。多くの人々はそれを聞いて、驚いて言った。「この人は、このようなことをどこから得たのだろう。この人が授かった知恵と、その手で行われるこのような奇跡はいったい何か。3この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んでいるではないか。」このように、人々はイエスにつまずいた。4イエスは、「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親戚や家族の間だけである」と言われた。5そこでは、ごくわずかの病人に手を置いていやされただけで、そのほかは何も奇跡を行うことがおできにならなかった。6そして、人々の不信仰に驚かれた。

それから、イエスは付近の村を巡り歩いてお教えになった。7そして、十二人を呼び寄せ、二人ずつ組にして遣わすことにされた。その際、汚れた霊に対する権能を授け、8旅には杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金も持たず、9ただ履物は履くように、そして「下着は二枚着てはならない」と命じられた。10また、こうも言われた。「どこでも、ある家に入ったら、その土地から旅立つときまで、その家にとどまりなさい。11しかし、あなたがたを迎え入れず、あなたがたに耳を傾けようとしないう所があったら、そこを出ていくとき、彼らへの証しとして足の裏の埃を払い落とさなさい。」12十二人は出かけて行って、悔い改めさせるために宣教した。13そして、多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人をいやした。

### 遣わされて行く【こども説教のために】

教会は、聖霊降臨（ペンテコステ）の不思議な経験から、どこまでも広がって行く歩みを始めました。聖霊が一人ひとりに分け与えられていることを信じた弟子たちは、聖霊に満たされた教会から送り出されては、新しい出会いを求めて旅を重ねたのです。

アンティオキアという町に辿り着いた弟子たちの集まりも、聖霊に満たされて教会となりました。そして、自分たちの仲間の二人、バルナバとサウロ（＝パウロ）を選び出して、皆で断食して祈り、手を置いて送り出しました。聖霊がお示しくださる新しい仕事、まだ共に聖霊に満たされる教会の仲間となっていない人々との出会いのために、遣わしたのです。そして、その先々で出会った人々の集まりは、一人ひとりに分け与えられた聖霊の満ちた教会となっていくのです。

世界中に送り出されては広がった教会の一つに、わたしたちも集められてきました。ここで、一人ひとりに分け与えられている聖霊が満ちたとき、わたしたちは、それぞれに聖霊のお示しくださるところに送り出されるのです。そこで新しい出会いのために生きます。神の恵みを信じてお互いを尊び、受け入れ合い、信じ合うことのできる「神の国」のために生きるのです。

## だれか手を引いてくれる人を

先主日の礼拝後、5月に沖縄の教会を訪問されたO兄が短い報告会をしてくださいました。3月にわたしたちの教会から送り出した榊原かをる師が仕える読谷教会の礼拝に出席され、また同師が日本基督教団の補教師に任職された准允式に臨席して来られたのです。O兄の提案もあり、早速、同師を訪ねる皆さんの旅行が計画されているようです。同師にとっては神学校を卒業してすぐの初任地ですし、縁もゆかりもない地で孤独を感じることもあるでしょうから、訪ねて来てくれる人があるのはうれしいはずです。わたしたちも、26年前に神学校を卒業し、九州・大分の小さな教会に仕えた4年間には、東京や岩手の家族はもちろん、送り出してくれた教会の方々がいろいろな機会に次々と訪ねて来てくださったことで、どれほど励まされたか分かりません。ぜひ、同師の日々の仕事を妨げないように配慮しながら、訪ねていただきたいのです。できれば、一回限り大勢で行かれるのではなく、代わる代わる訪問を続けていただくのがよいのではないのでしょうか。

一人の伝道者を送り出すということは、教会にとって大きなことです。わたしたちの教会では、毎年7月に更新している「会員名簿」に「元牧師」と並んで「出身教職」のお名前を掲載しています。ただ連絡の便宜のためにそうしているわけではありません。「元牧師」も「出身教職」も、教会が送り出した伝道者です。その教師方を、わたしたちは祈りに憶え続けようとしているのです。伝道者としての働きをまっとうさせるためです。あるいは、その働きに挫折したとき、仕切り直しが必要になったとき、その働きを終えたとき、帰って来ることのできる群れであり続けるためです。

それは、しかし、伝道者として送り出した教師方だけに当てはまることではありません。「会員名簿」に掲載されているすべての教会員、そして、そこには掲載されてはいないけれども礼拝へと招かれて来られているすべての方々にも当てはまることです。

教会の礼拝は、皆さんが集められてくるところから始まります。神の招きを受けて、わたしたちは一つところに集います。御言葉を聞き、主の食卓を囲み、祈りと讃美を共にささげます。そして、互いに祝福を告げ合う群れであることを確かめた一人ひとは、神の祝福に後押しされて、派遣の言葉と共にここから送り出されていくのです。

一人ひとりの送り出されていくところは、異なります。聖霊がお決めくださっているのです。多くの者は、それぞれの家族や職場、学校など日常生活を共にする人々のところに送り出されることでしょう。もちろん、同じ礼拝に集っていた誰かのところに送り出される者もあるかもしれません。そこには、**だれか手を引いてくれる人**がいないかと待っている人がいるのです。

## 二人で遣わされる

このようなことを申し上げると、皆さんの中には、「自分は、家族や周囲の者に押しつけがましいことはしたくない」と思われる方があるかもしれません。確かに、宗教や信仰というものは、だれかに説得されて受け入れる、というようなことではないのでしょうか。わたし自身は、他のどのようなことにも増して、自発性や主体性が重んじられる事柄だと考えています。なぜなら、それは、自分自身に対しても、他の者に対しても、大きな責任を伴う事柄だからです。それは、自分自身の生き方、振る舞い方、人生を定めるものであり、それによって周囲の他の者の生き方、振る舞い方、人生にも影響を与えるものだからです。けれども、だからこそ、一人ひとりが本当の意味で自発的、主体的に、そして責任をもって宗教を、信仰を自分のものにしていただくために、わたしたちは、どの一人のことも放置してはいけないうのです。その人が本当に見えるようになり、自分の足で立つことができるようになるまで、手を引き、支え、共に歩む者が傍らにすることが、必要です。

難しいことが求められているわけではありません。だれかを説得する言葉が求められているのでもありません。主イエスは、十二人の弟子を**二人ずつ組みにして**お遣わしになられたとき、ただ**汚れた霊に対する権能**だけをお授けになって、何も持たせずに送り出されたのです。弟子たちに求められたことは、遣わされたところのどこでも家に入り、そこに留まることでした。迎え入れられている限り、そこに留まり、拒まれれば、潔くそこを去るのです。遣わされた人のところに留まっている間、弟子たちは、その人の心が神へと向かうように願い、その心を混乱させる諸々が解きほぐされるよう助け、病む者の癒しを祈ったのです。アンティオキアの教会から遣わされたバルナバとパウロも、使徒たちに倣って同様にしたことでしょう。そして、その上で求められれば、神の言葉を語ったのです。

礼拝へと呼び集められたわたしたちは皆、そのことのために、ここから送り出されるのです。それがうまくいかないことがあるのは、わたしたちが自分一人でそれを成し遂げようとするからかもしれません。主イエスは、弟子たちを二人一組で遣わされました。アンティオキアの教会も、バルナバとパウロを二人一組で送り出しました。二人組で遣わされる者は、まず、お互いに対して遣わされているのです。そうすることで、自分自身もだれか手を引いてくれる人の助けが必要な一人であることを忘れないで居続けるのです。そのような一人として、静かに黙ってだれかの隣に留まることをわきまえるのです。求められていないことを押し付けるのでなく、ただ、その人が自分の足で立ち、自分自身の目で見ることができるようにと祈り願って、その手を引き、その歩みを支えることに徹すればよいのです。